

明治大正美女追憶

長谷川時雨

青空文庫

最近三、五年、モダンという言葉の流行は、すべてを風靡ふうびしつつして、ことに美女の容姿に、心に、そのモダンぶりはすさまじい勢いである。で、美女の評価が覆くつがえされた感があるが、今日のモダンガールぶりは、まだすこしも洗練を経ていない。強烈な刺戟しげきは要するにまだ未熟で、芸術的であり得ないきらいがある。つねに流行は、そうしたものだといえればそれまでだが、デパートメントの色彩で、彼女らはけばけばしい一種のデコレーションにすぎない。

さて振りかえって過ぎ越しかたを見る。そこにはいつも、一色の時代の扮ふん飾しよくはある。均一の品の多いのは、いつの世とてかわりはないが、さすがに残されるほどのものには、各階級を支配し、代表した美がある。尤も現代の理想は、差別を廃し、平等となる精神にある。とはいえ、根本は一つでありながら、美と善とは両立せねばならぬ。そして生いれながらにして、美を心に、姿に授けられたものは、砂礫されきのなかのダイヤモンド、生いきるにけわしき世の、命の源泉として、人生を幸福にするものといえる。

かつて、「現代女性の美の特質」とて、大正美人を記しるした中に、あまりに世の中の美人観が変ったとて、「現代は驚異である」とわたしは言っている。現代では、度外どはずれという

ことや、突飛^{とつび}ということが辞典から取消されて、どんなこともあたりまえのこととなつてしまつた、実に「驚異」横行の時代であり、爆発の時代である。各自の心のうちには空さ^{くさ}も飛び得るという自信をもちもする。まして最近、檻^{おり}を蹴破^{けやぶ}り、桎梏^{しつこく}をかなぐりすてた女性^{おんな}は、当然ある昂^{たかぶ}りを胸に抱^{いだ}く、それゆえ、古い意味の（調和）古い意味の（諧音^{かいおん}）それらの一切は考えなくともよしとし、（不調和）のうちに調和を示し、音楽^{おんがく}を夾雜^{きやうざつ}音^{おん}のうちに聴くことを得意とする。女性の胸に燃えつつある自由思想は、（化粧）（服装^{ふさう}）（装身）という方面の伝統を蹴り去り、外形的に（破壊）と（解放）とを宣告し、とのわな^{わな}ない複雑、出来そくなつた変化、メチャメチャな混乱、——いかにも時代にふさわしい異色を示している——と語っている。

その時代精神の中樞は自由であつた。束縛は敵であり、跳躍は味方だつた。各自の気分によつて女性はおつくりをしだした。美の形式はあらゆる種類^{しゆるい}のものが認識され、その奔放^{ほうぱう}な心持ちは、ゆきつくところを知らずにいまもなお混沌^{こんとん}としてつづいている。

この混沌たる時代粧よ。

改革の第一歩は勇氣に根ざす、いかに馴化^{じゆんか}された美でも、古くなり氣が抜けては、生氣^きに充ちた時代の氣分とは合わなくなつてしまう。混沌たる中から新様式の美は発^はする。

やがて、そこから、新日本の女性美は現わされ示されるであろう。

古いにしえから美女は京都を主な生産地としていたが、このごろ年ごとに彼地へ行つて見るが、美人には一人も逢あわなかつたといつてよいほどであつた。一世紀前位までは、たしかに、平安朝美女の名残りをとどめていたのであろうが、江戸のいんしんは、彼地から美女を奪つたといえる。徳川三百年、豊麗な、腰の丸み柔らかな、艶えんや治な美女から、いつしか苦味をふくんだ凄せいえん艶な美女に転化している。和歌よりは俳句をよろこび、川せんりゆう柳になり、富本とみもとから新内節しんないふしになつた。その末期まつごは、一層ヒステリックになつた。

そのヒステリーが、ひとつ、ガチャンと打破したあとに、明治美人は来た。その初期は、維新当時、男にも英雄的人物が多かつた通り、美女もまた英雄型であつた。と、いうのは、気宇のすぐれた女ばかりをいうのではない、眉まゆも、顔だちも、はれやかに、背丈せただけなどもすぐれて伸々のびのびとして、若竹のように青やかに、すすくと、かがみ女の型をぬけて、むしろ反身そりみの立派な恰好かっこうであつた。

上代じょうだい寧楽ならの文明は、輝かしき美麗な女を生んで、仏画に仏像に、その面影を残しとどめている。平安期は貴族の娘の麗わしさばかりを記している。鎌倉時代、室町むろまちのころ

にかけては、寂^{さび}と渋味を加味し、前代末の、無情を觀じた風情^{ふぜい}をも残し、武家跋扈^{ばつこ}より来る、女性の、深き執着と、諦^{あきら}めをふくんでいる。徳川期に至って目に立つのは、美女が平民に多く見出^{みいだ}されることである。これは幕府が大名の奥方、姫君などを籠^{かご}の鳥同様、人^{ひと}質^{とし}として丸の内^{かみやしき}上屋敷に檻^{かんきん}禁^{かん}させていたので、美しき女の伝もつたわらぬのでもあれば、時を得て下層の女の氣焰^{きえん}が高まったのもあろう。湯女^{ゆな}、遊女、水茶屋の女たちは顔が売ものである。そのなかで、上代にはあれほど手練のあつた貴婦人たちが、干菓子のように乾^ひからびた教育を、女庭訓^{おんなていきん}とするようになってから、彼女たちに代つたものはないであつたか、大名たちの下屋敷^{しも}や国許^{くにもと}における妾狂^{めかけ}いは別として、自由なる社交場として吉原^{よしわら}や島原^{くもるわ}の廓^{くわく}が全盛になつた。機を見るにさかしい者たちは、遊女^{ふんそう}らの扮粧^{ふんそう}を上流の美女に似せ、それよりも放逸で、派手やかであり、淫^{いん}蕩^{とう}な裊^{しな}姿^{すがた}をつくりだし、その上に教養もくわえた。で、高名な浮世絵師えがくところの美女も、みなその粉^{ふんぼ}本^{ほん}はこの狭^{きやう}斜^{しゃ}のちまたから得ている。美人としての小伝にとる材料も多くはこの階級から残されている。その余力が明治期のはじめまで勢力のあつた芸妓^{げいぎ}美である。貴婦人の社交も拮^{ひく}まり、その他女性の擡^{たい}頭^{とう}の機運は盛んになつたとはいえ、女学生スタイルが花柳^{かりゆうじん}人の跳^{ちやうりやう}梁^{りやう}を駆逐^{くちく}したとはいえ、それは新しく起つた職業婦人美とともに大正期

に属して、とにかく明治年間には芸妓の跋扈ばつこを認めなければならない。歴々たる人々の正夫人が芸妓上りであるという風潮に誘われて、家憲の正しいのを誇った家や、商人までが、一種の見得みえのようにして、それらの美女を根引ねびきし、なんの用意もなく家婦とし、子女の母として得々としたことが、市民の日常、家庭生活の善良勤儉な美風をどんなに後になって毒したかしかない。その軽率さ、いかに国事としげく、風雲に乗じて栄達し、家事をかえり見る暇いとまがなかったといえ、その後、頻々ひんぴんとして起った、上流子女の淫事は、悲しき破綻はたんをそこに根ざしている。

思えば、国家の大事を議する人々の、機密の集りだという席が酒亭であって、酌するものを客の数より多くをならべて、敢て恥あへず、その有様を撮とらせ、そのまた写真を公然と新聞に掲げていたのが、漸く影を見せなくなったのは、やっと、大正十二年大震後のことではないか。

あの謹厳な、故山やまがた県老公もまた若くて、鎗踊やりりをおどつたとさえ言伝えられる、明治十七、八年ごろの鹿鳴館時代は、欧風心酔の急進党が長夜の宴を張って、男女交際に没頭したおりであった。洋行がえりの式部官戸田子爵夫人極子が、きわめて豊麗な美女で、故伊藤公が魅惑を感じて物議をひきおこしたとの噂うわさもあった。岩倉公爵夫人——東伏ひがしふし

見宮大妃周子殿下の母君も、殿下が今もお美しいがごとく清らかな女だった。大
限侯夫人綾子も老いての後も麗々しかったように美しかった。その中にも故村雲尼公
は端麗なる御容姿が、どれほど信徒の信仰心を深めさせたか知れなかった。

富貴楼お倉、有明楼おきく、金瓶楼今紫は明治の初期の美女代表で、あわせて

情史を綴っている。お倉は新宿の遊女、今紫は大籬の花魁、男舞で名をあげ、吉

原太夫の最後の嬌名をとどめたが、娼妓解放令と同時に廃業し、その後、薬師錦

織某と同棲し、壮士芝居勃興のころ女優となったりして、男舞いを売物に地方を廻

っていたが、終りはあまり知れなかった。お倉は妓籍にあるころよりも、横浜開港に目を

つけて、夫と共に横浜に富貴楼の名を高め、晩年も要路の人々の仲にたつて、多くの養女

をそれぞれの頭官に呈して、時世の機微を覗き知っていた。有明楼おきくは、訥升沢

村宗十郎の妻となつて——今の宗十郎の養母——晩年をやすらかに逝つたが、これまた浅

草今戸橋のかたわらに、手びろく家居して、文人墨客に貴紳に、なくてはならぬ酒亭の

女主人であつた。

芳町の米八、後に今紫と一緒に女優となつて、千歳米波とよばれた妓は、わたし

の知っている女の断髪最初だと思う。彼女は若いころの奔放さをもちながら、おとろえ

てゆく嘆きに堪えないでか、大酒をあおつて、芝居見物中など大声をあげていた。浴衣の腕をまくり、その頃はまだ珍しい腕輪を見せ、やや長めの断髪の下から、水入りの助六（九代目市川団十郎歌舞伎十八番）のような鉢巻を手拭でして、四辺をすこしもはばからなかった。彼女が米八の若盛りに、そのころの最新知識の秀才二人を見立て、そのうちの誰が、この米八の配偶として最もよいかという事になり、めでたくその一人と結びはしたものの、その人に早く死別して、あたら才女も奇矯な女になってしまったのであった。また赤坂で、町芸者常磐津の師匠ともつかずに出ていたおちようが、開港場の人気の、投機的なのに目をつけて横浜にゆき、生糸王国をつくった茂木、野沢屋の後妻となり、あの大資産を一朝にひつくりかえした後日譚の主人公となつたのも、叶屋歌吉という、子まである年増芸妓と心中した商家の主人の二人の遺子が、その母と共に新橋に吉田屋という芸妓屋をはじめ、その後身が、益田男爵の愛妾おたきであり、妹の方が、山県有朋公のお貞の方であるというのは、出世の著るしいものであろう。尤も、故伊藤公の梅子夫人も馬関の妓、桂かな子夫人も名古屋の料亭の養女ではある。女流歌人松の門三艸子は長命であつたが、その前身は井上文雄の内弟子兼妾で、その後、深川松井町の芸妓小川小三である。水戸の武田耕雲斎に思われ、大川の涼み船の中で白刃にとりまかれた

という挿話そうわももっている。

さて、駟足かけあしになつて、列伝のように名だけをならべるが、京都の老妓なかにしき中西君尾は、

井上侯が聞太もんただつた昔の艶話つやばやしにすぎないとして、下田歌子しもだうたこ女史は明治初期の女学、ま

た岸田俊子きしたとしこ、景山英子かげやまひでこは女子新運動史をも飾る美人だつた。愛国婦人会を設立した奥村おく

五百子むらいおこも、美丈夫のような美しさがあつた。上野公園の石段にたつて叫んでいた宮崎みやざき

光子みつこも立派であつた。有島氏と死んだ中央公論社の婦人記者波多野秋子はたのあきこ、さては新劇壇

の明星松井須磨子まついすまこも書きのこされまい。芳川鎌子よしかわかまこを知る人は、それより一足前にあつた、

大坂鴻池こうのいけ夫人福子の哀れな心根に、女の一生というもののわびしさをも感じるであろ

う。そういう点で、いまは宮崎龍介みやざきりゆうすけ氏夫人であるもとの筑紫つくしの女王白蓮びやくれん女史の燦あ

子きこさんは幸福だ。

なお多くの人の名をつらねても、伝の一片を書き得ないのを怨みうらとしてこれを終る。

——昭和二年六月十五日『太陽』明治大正の文化特別号所載——

青空文庫情報

底本：「新編 近代美人伝（上）」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年11月18日第1刷発行

1993（平成5）年8月18日第4刷発行

底本の親本：「近代美人伝」サイレン社

1936（昭和11）年2月発行

初出：「太陽 明治大正の文化特別号」

1927（昭和2）年6月15日

入力：門田裕志

校正：川山隆

2007年9月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

明治大正美女追憶

長谷川時雨

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>